

# は し が き

学 校 長 河 合 茂 治

本年9月4日臨時教育審議会が発足し、教育制度、内容等の全般的な洗い直しを諮問されている。我々教育関係者の責務は誠に重大である。

日本の近代化にとって知識習得型教育が国力の増進に役立ったことは事実であり、戦後の個人の自由と尊厳、教育の民主化は教育の機会均等化を促がし、大学高校の増設、マンモス化に拍車をかけた。そして次第に教育の中央集権の効率化や管理主義的傾向を生み、特に高度経済成長期における大量生産的画一教育は確かに速効を果したといえよう。しかしその反面、個性尊重の教育は次第に影を潜め、その軌道から脱落した若者達は自らの無力感や苛立ちから非行へと走るのも当然の結果と思われる。また教育の荒廃という悲しい現実の本質的要因には、内外政治、経済、思想の昏迷や価値感の多様化なども挙げられよう。現代社会は誠に複雑かつ流動的不透明時代である。その中に巣くう社会悪に対する許容的、黙認的な風潮や諸企業の経済最優先的道德性の欠如、学歴重視の社会的状況、特に個性無視の偏差値による選別、序列化などが複雑に絡み合せて、青少年の正しい価値判断を一層困難ならしめている。

今日最も必要なことは、画一的知識重視の教育ではなく、豊かな個性と創造性を育くむ人間一人一人の個性を尊重した、自らの頭で考え行動し得る力の育成であり、人間が人間らしく育ち、生きることの出来る人間教育研究とその推進にこそ意を尽くすべきではないだろうか。

教育改革論義に直面している現在、こゝに『高校教育研究』第36号を発刊するに至ったことは誠に意義深いものがあると同時に、その責任の重大さを痛感する次第である。

本号に収録された論文8件の概要を記すと、まず玉鉾教官の「本校生徒会活動の現状」は最近の本校生徒会のしくみと生徒の自治活動を重視した生徒会活動の概況を述べたものであり、上田教官の「探究問題による学習について」の論文は、本校教官、大学教官、石川県高校教諭による数学教育研究グループの研究成果の一つである。

小倉教官の「地図と板書」、川上教官の「英語II Aの指導について」、梶教官の「家庭一般における被服製作の指導について」の三編は、いずれも現高校教材取扱いの実践研究報告である。中原教官の「理科Iの化学分野と選択化学における教科の関連」は同教官の今日迄の実践研究の総仕上げともいべきものである。同教官は「モル概念に基づく化学教材研究」により、昭和42年に越馬賞、同49年に日本理化学協会功労賞を受賞された高校化学教育の権威者であり、示唆に富む貴重な実践研究論文であると高く評価したい。

滝野教官の「青年実業家の形態・機能に関する一考察」および高瀬教官の「明治時代における日本人の中国探検旅行とその紀行詞藻」の二編は学術研究論文としての労作である。特に後者は、氏の8回に亘る中国訪問によって実際に現地を訪れ、諸状況検証の上での積年の研究成果として注目すべきものである。

上記の諸論文は、毎日の授業、校務分掌など実に多忙な勤務の中での研究成果である。本号発行に当り、各方面からの忌憚のないご意見、ご指導を戴ければ誠に幸である。